Ｈ２２年度秋田大学研究者海外派遣事業により
実施した研究・教育活動の成果報告について

平成２５年　３月　７日

所属・職名：　教育文化学部・教授

氏　　名：　上田由紀子

派遣先機関名：マサチューセッツ工科大学　　（国名：米国　　）

派遣期間　　：平成２３年　２月　１日～平成　２３年　９月　２６日

研究課題･目的：On Functions of the CP System in Language Faculty: a View from Agreement and Related Phenomena

（言語器官における CP システムの機能について：一致現象および関連事象の視点から）

本研究は、生成文法理論のミニマリスト・プログラムの枠組みに基づいて、人間言語における CP 領域の機能をより明らかにすることが目的である。また、この言語理論の妥当性を脳科学の視点から明らかにする方法論を学ぶことも目的である。

□研究成果（列記願います）

・論文

上田由紀子　2011a　「日本語の空主語とモダリティ」　長谷川信子（編）『７０年代生成文法再認識―日本語研究の地平』（ISBN: 978-4-7589-2170-1）第 11 章担当 pp.277-294　開拓社.

上田由紀子　2011b　fMRI を使用した日本語の「自分」を含む文処理に関わる脳活動報告」『日本言語学会第 143 回大会予稿集』　日本言語学会　pp.304-309,

Hashimoto, Y., K. Nakamura, Y. Ueda, A. Uchibori, H. Toyoshima, and T. Kinoshita. 2012.　Two Analytical Studies for an fMRI Study on Brain Activity during Sentence Processing.　*SICE 2012 International Conference on Instrumentation, Control and Information Technology*, The Society of Instrument and Control Engineers, pp. 1354-1358.

Ueda, Yukiko.　2013.　A Cross-Linguistic Approach to Mysterious Scope Facts.　Eds. by Kook-Hee Gil, Steve Harlow, and George Tsoulas, *Strategies of Quantification*.　(ISBN: 978-0-19-969243-9 (hbk.), 978-0-19-969244-6 (pbk.)). Chapter 9, pp. 173-188.　Oxford University Press: UK.

・学会発表

上田由紀子，橋本洋輔，中村和浩，内堀朝子，豊嶋英仁，木下俊文　2011a　fMRI を使用した日本語の「自分」を含む文処理に関わる脳活動報告」*日本言語学会第 143 回大*

会 日本言語学会

内堀朝子，上田由紀子　2011b　fNIRS と fMRI を用いた言語処理研究：照応形を含む文法処理時の脳活動」　*第2回 NU-Brain シンポジウム―光脳機能イメージングの研究開発および臨床応用に関するシンポジウム*　日本大学理工学部

Hashimoto, Y., K. Nakamura, Y. Ueda, A. Uchibori, H. Toyoshima, and T. Kinoshita. 2012.　Two Analytical Studies for an fMRI Study on Brain Activity during Sentence Processing.　*SICE 2012 International Conference on Instrumentation, Control and Information Technology*, The Society of Instrument and Control Engineers.

橋本洋輔，中村和浩，上田由紀子，内堀朝子　2013「英語照応形処理の神経基盤―fMRI による英語母語話者と非母語話者の比較」　*第 3 回 NU-Brain シンポジウム―光脳機能イメージングの研究開発および臨床応用に関するシンポジウム*　日本大学理工学部

・その他

□教育活動等（列記願います）

□海外派遣事業中の教育・研究活動が，帰国後の研究等の活動にどのように反映されたか概括ください。

MIT での CP 領域に関する研究は、モダリティとの一致現象という点から、論文（本の章）上田（2011a）の改訂に大いに役立った。また、CP 領域と数量詞解釈に関する言語横断的アプローチを Ueda (2013)（本の章）で Oxford University Press から出版することができた。言語理論の妥当性を脳科学の手法から検証する点においては、帰国後、新たなタスクと解析方法を工夫し、国内外の学会で発表している。